魔法少女リリカルなのは 異世界から来た少年

牛丼680円

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　異世界から来た少年

【Ｎコード】
Ｎ０１０５Ｎ

【作者名】
牛丼６８０円

【あらすじ】
どこにでもありそうな世界…
そこに住む少年はある日、巨大な光の波に巻き込まれ別世界へと飛ばされた。
飛ばされた衝撃で記憶を失った少年はその世界でどうなっていくのか…

※小説初心者です。誤字脱字やおかしな表現があるかもしれません

プロローグ（前書き）

初めてです！
文力皆無ですので意味がわからない所があるかもしれません。
そのときは問答無用でおっしゃって下さい
m（＿＿）m

プロローグ

とある世界
そこの街にはどこにでもいそうな人々ががいた

「ふぁ～あ…疲れたな…」
この少年もこの世界の住人だった
「帰ったらさっさと……ん？」
少年はなにやら胸騒ぎがしていた
「なんなんだ？この感じ…嫌な予感がする…早く爺ちゃんの所に帰ろう」
少年は帰路につく為に道を曲がった。道を曲がるとそこには…
「なんなんだよ…あれ…光の…波？」
その巨大な光の波は街を飲み込んでおり、もの凄い速さで近づいていた
「ヤベッ！逃げな…うわぁぁぁぁ！！」
少年は走って逃げようとしたが光の波がはやすぎて巻き込まれてしまった

※※※※※※※※※※※※※
地球　海鳴市某所

静かな住宅地にいきなりズドンという音が響いた

「痛った～（泣）何なんだよ…いきなり…」
落ちてきた少年の周りには大きなクレーターができていた
「うわっ…すげぇクレーター…あれ？そう言えばなんで俺はここに…？あれ！？……」
こうして少年の物語は始まっていくのだった

プロローグ（後書き）

作者「いかがだったでしょうか？」
？？？「『いかがだったでしょうか？』じゃねぇよ！まだプロローグじゃねぇか！」
作者「え～（「３「）」
？？？「顔文字使うな。キショイ」
作者「キ…キショイ！？オヤジにも言われたこと無いのに！！」
？？？「当たり前だ。お前自分のオヤジに顔文字使った事無いだろ」
作者「そうだっけ～…？そんな事より何か言いたかったんじゃないの？」
？？？「強引だな…まぁいい、まずは主人公の俺の名前がでてないだろ！」
作者「まずって…他にもあるのね（泣）プロローグだからに決まっているだろう」
？？？「他の作者さんは出している所もあるぞ」
作者「なん…だと？」
？？？「他には…原作キャラが出ていない。デバイス系が決まってない。強引過ぎる。読みづらい。さらに…」
作者「もういいよ！！（泣）目の前が曇って何も見えないよ！！」
？？？「だろうな。とりあえず今はこの位にして…さっさと答えろ作者」
作者「うぅ…作者の扱いがヒドい…（泣）順番に答えると原作キャラやデバイスは話上出しづらかったので、次回以降にまわってもらいました。話が強引過ぎたり、読みづらかったりするのは私の文才力が無いからです！すみませんでした！！」
？？？「威張るな！！」
作者「ぐべらッ！」
？？？「ふぅ…気絶したか…それじゃあまだプロローグなのですが

感想などお待ちしています。誹謗中傷などは、作者の精神が本当に脆いのでできる限りオブラートに包んであげてください。それでは！！」

第一話　始まりはいつも突然　突然過ぎるのもどうかと思うけど？（前書き）

第一話です

第一話　始まりはいつも突然　突然過ぎるのもどうかと思うけど？

地球…海鳴市某所
いきなり空から降ってきた少年は墜落地点から少し離れた場所に移動していた
「ここは…どこなんだ？」
少年は立ち止まり、周りを見渡した
「なんで…」
少年…ライトは考えていた。何故自分がこんな場所にいるのか、何故自分の記憶が無いのか、何故記憶が無いのに名前を覚えているのかしかしライトはすぐに考えるのを止めた。
「めんどくさい…」
ただ単純にめんどくさくなったからだ
「これからどうしようかな…？」
ライトはふと腕を見てみると…
「腕輪…？」
翡翠色に光る宝石が一つ埋め込まれた腕輪がついていた
「何だろ…これ…」
ライトが宝石にふれるといきなり眩い光が放射された
「！！？」
―――起動完了―――
光が収まり目を開けると…
「……」
特には変わってなかった
「気のせ…」
―システム・オールグリーン―

『マスター認証を行います。名前をいってください』
「！？」
いきなり腕輪がしゃべりだした
『マスター認証を行います。名前をいってください』
「へっ！？ラ…ライト・レイフォール…」
？？？『マスター名称…声紋…照合開始……一致を確認…デバイス機能を開放……おはようございます。マスター』
「うえっ！？お…おはよう…？」
『どうかしましたか？』
「お前…何なんだ？」
ライトは驚きながらも質問した
『私は腕輪型インテリジェントデバイス　ＶＰ－ＤＳＷ…通称デスティニーです』
「そ…そうですか…ご丁寧にどうも…」
『敬語はやめてください。あなたはワタシのマスターなんですから』
「あ…ゴメン」
何故かデバイスに注意されたライト
「…それじゃあ此処…どこかわかるか？」
『ここは海鳴と呼ばれる集落ですね』
「……」
『どうかなさいましたか？』
「いや…地名を言われてもね」
『変な人ですね…聞いてきたのはあなたでしょう』
「まぁそうなんだけど…記憶が無いからさ…」
『なるほど…フッそんなんで記憶喪失が治ったら誰も苦労しませんよ』
「なっ！？」
デスティニーはライトの考えを軽く笑った
『そんなことよりバリアジャケットを創りましょうよ』
「そんなこと！？」

デスティニーの中ではライトの記憶よりもバリアジャケットらしい
「自分のマスターの記憶よりもバリアジャケットが大切っておい…（泣）」
『ジャケット～♪ジャケッ～ト～♪ジャ～ケット♪ジャケット～♪』
「わかったから歌うな！！（泣）」
デバイスに泣かされかけていた…
数分後
「そもそもバリアジャケットってどうやって作るんだ？」
『マスターが想像した物を読み取って、それを具現化させて創ります』
「あ～要は考えろって事ね…」
―３０分後―
「よし！これだ！！」
『それでは読み取ります』

その瞬間周りが光に包まれた
光がおさまるとそこには白と黄色の騎士団の様な服を着たライトがいた
「良いじゃん♪」
『問題無いですね。それでは次は武器の形をお願いします』
「それはさっきついでに考えた」

また瞬間的に光が発せられ光がおさまると
「銃剣だ！」
『珍しい武器ですね～』
「何かカッコイいしさ」
『それにしてもよく記憶も無いのにこんな物をリアルに考えつきますね』
「あ……なんでだろね（笑）」
どことなく明るいライトだった。しかしいきなり周りから変な感覚

がしだした
「なんだ！？この感じ…」『どうやら結界が張られたようですね。向こうでそこそこ高い魔力反応が２つあります』
「なるほど…ところで俺の魔力ってどれくらい？」
『ランクで言うとＳＳ＋ですね』
「それって高いのか？」
『マスターの年齢で言えば有り得ない程高いです』
「チートだな…（苦笑）それじゃあ向こうの反応は？」
『二つともＡＡＡ＋位ですね』
「俺よりは？」
『下です。それよりも行くんでしょう？急ぎましょうよ』
「そうだな。空飛べるよな？」
『当然です』
「なら行くぞ！」
ライトは飛び上がって魔力反応のある方向へもの凄い速さで向かった

第一話　始まりはいつも突然　突然過ぎるのもどうかと思うけど？（後書き）

作者「第一話終了！！」
ライト「今回もだいぶ短いな」
作者「元々メール機能だけで書いてたからね。短い分読みやすいだろ？」
ライト「話が跳躍し過ぎて読みづらくなっているということも考えられるぞ」
作者「（。□。；）」
ライト「言葉が無いからって顔文字にすんな」
作者「だ…大丈夫だろ！きっと……」
ライト「最後弱々しいな！」
作者「仕方ないだろ！！自分ではわからないし！ただでさえ文章力皆無なのに！！（泣）」
ライト「わかったわかった。汚いから泣くな」
作者「うぅ……グスッ」
ライト「そんな事より次回は？」
作者「次回はライトの設定などを入れたいと思います…」
ライト「本編は？」
作者「先にしておかないとライトの能力が分かりづらいだろ？本編はその後」
ライト「なるほどな」
作者「読んでくださった方々、感想など待ってます！！」
ライト「厚かましい作者ですがよろしくお願いします！」
作者「おい！それを言うなよ！！」
作者／ライト「「それでは！！」」

オリキャラ設定（前書き）

オリキャラ設定です

オリキャラ設定

設定

ライト・レイフォール

推定９歳

魔力ＳＳ＋

魔力光　銀

魔力変換資質　風，光，雷

レアスキル
ＳＥＥＤ

ＳＥＥＤ
視覚や聴覚、動体視力が限界を超える
何やら色々条件が必要らしいが…

容姿
姿はＴＯＡの短髪ルークで、後ろ髪をヒモで少し縛っている。
色は薄い緑。
バリアジャケットはＴＯＷＲＭ２の守護騎士シリーズのようなもの
ある時大規模な次元震に巻き込まれ飛ばされてきた（てか落ちてきた）その時の衝撃で名前以外の記憶が消えた。

性格
どこにでもいるお気楽バカ。だが状況理解力は高いのでシリアスムードの時はシリアスになる。結構前向きな性格で純粋少年。悩み事を隠してもほとんどが顔に出る

彼には重大な秘密が…

使用デバイス
デスティニー
待機形態…腕輪型
セットアップ時…銃剣
女性の声で主人公がこの世界に落ちてきた時から何故か一緒にいた。

使用モード
ブレード
普通の銃剣
ある程度の砲撃が打てる。

ファング
少し小さくなった二本の銃剣
射撃は小さい魔力弾の乱射位しかできなくなるが行動スピードが上がる。

バスターソード（ランチャー）
身の丈位までデカくなった武器

バスターソードは銃剣の銃の形を捨て大剣にしたもの、射撃能力は無い
バスターランチャーはソードと同じサイズだが、ソードとは逆に斬撃能力が無い代わりに射撃能力に特化している。剣先から砲撃を撃

つことが出来るが、より強い砲撃を撃つときは刀身が真ん中から上下に別れ、中から別の銃口を出し、それを使う。
スピードは３モード中最遅だが一撃が重い

フルドライブ
トランザム
自分の魔力をオーバーロードして身に纏い、スピードやパワーなどの能力を極端に上げる
しかし、自分の体がまだ未熟である事や負担が半端ないため使用時間は５分間と決まっている
さらに使用するとしばらくの間まともに魔法が使えなくなる

使用技
他の人の魔法をパクったり、その改良版の魔法を扱う
テイルズの技や術も使える（魔神剣とか蒼破刃とかｅｔｃ．）

オリキャラ設定（後書き）

ライト「……」
作者「どした？」
ライト「容姿がルークって…どんだけテイルズ好きなんだよ」
作者「良いじゃん。ルークかっこいいじゃん」
ライト「否定はしないが…って魔力変換資質多すぎだろ！」
作者「風，光，雷かっこいいじゃん！！」
ライト「お前が厨二病患者だということがわかるだろ！！」
作者「なにを言っている！厨二病患者にそこまで悪い奴は居ないんだよ！！」
ライト「あくまで『そこまで』だがな」
作者「そりゃ…ねぇ？」
ライト「俺に聞くな…それよりもあの性格は何だ？いままでの話でお気楽バカっぽい事したか！？」作者「ちゃんとみた？『シリアスムードではシリアスになる』って。プロローグは微妙だけど第一話では記憶が無くなった直後だからお気楽出来ないでしょ」
ライト「まぁ…確かに…」
作者「大丈夫！今後バカになってもらうから！！」
ライト「それは嫌だ！！」
作者「え～…まぁいいや。勝手にバカっぽくするから」
ライト「やめろ」
作者「ライトの技は基本的にテイルズだね」
ライト「テイルズ系か。するといずれは…」
作者「秘奥義使えるかもね」
ライト「かもかよ…」
作者「次は…レアスキルとフルドライブ？」
ライト「レアスキルがＳＥＥＤでフルドライブがトランザムってガンダムも入れんのか…」

作者「強くね？」
ライト「チートすぎる。とりあえず次回は？」
作者「予定通り原作キャラを出そうと思います！」
ライト「そういえば時期がわかるような事一回も書かれてないぞ？」
作者「忘れてた…時期的には無印だよ」
ライト「じゃあジュエル・シードか…面倒だな～んで？俺はどっちサイド？」
作者「そこんところは次回で」
作／ラ「「それでは！！」」

第二話　桃色の砲撃と黄色の閃光　この人達は本当に子供ですか？（泣）（前

第二話です。

第二話　桃色の砲撃と黄色の閃光　　この人達は本当に子供ですか？（泣）

今魔力反応がある方向に飛んでるけど…
空飛ぶの気持ちいい♪
ずっと飛んでいたいよ
『ダメですよ。さすがに魔力を使いすぎます。何よりも私が疲れますから』
こいつ…何気に自分主義か
『そうでなくては生きていけませんからね。このご時世』
「な！？人の心を読んだだと！？」
『安心してください。すべて声に出てますから』
「……」
『ほらほら、もうすぐ着きますよ』
なんやかんややってると茶髪と金髪の二人の少女と…
「猫？」
『形状からして猫ですね』
「猫ってあんなにデカかったっけ？」
『そんなわけないでしょう。猫から暴走した魔力の反応があります。おそらく膨大な魔力で巨大化しただけですよ』
「それよりもよく寝られるな…デカ猫」
『おそらく二人のどちらかが攻撃を加えたのでしょう』
「ですよね～」
すると寝てた猫が起き上がり何処かへ行こうとした
「おっ！猫が起きた」
それを見た金髪の少女は慌てて猫に向かおうとする。
しかし茶髪の少女が金髪の少女に砲撃を撃とうとしていた
「あ！危ない！！」
ライトは無意識に金髪の少女の方へ向かっていた
※※※※※※※※※※

ズドンという音と同時に煙が上がった
「あ…当たった？」
「気をつけて…まだかもしれない」
「う…うん」
茶髪の少女の近くにいたフェレットはその少女に注意を促し煙が晴れていくのを待っていた。そして煙が晴れてそこに居たのは…
「不意打ちとはあぶねぇな…シールド張ってなかったら怪我してたぞ」
「えっ！？」
「いつの間に…！」
茶髪の少女とフェレットは突然現れたライトに驚いていた
ライトは金髪の少女の安否を確認する為に振り返った
「大丈夫か？お前」
「……え！？あ…」
「！！（コイツ…なんて悲しそうな目をしてんだ！？）」
金髪の少女はいきなり声をかけられ困惑したような表情をしていたがどこか悲しそうだった
「にゃ～」
そんな事をしていると猫は外に出ようとしていた
「「「あっ…！」」」
「デスティニー！封印…出来るな！？」『了解です！シーリング・モード！』
二人の少女とフェレットが猫の突然の動きに気をとられてる隙にライトは猫に銃剣の剣先をむけた
『呪文は頭に自然と出るはずです』
「わかった！　……ギル・ギム・ガム・ゴゥ・グフォ！　ジュエル・シードＮｏ．？！！」
『封印！』
剣先から放たれた光は一直線に猫に向かっていき体にあたるとそこから青いひし形の宝石のような物が出てきて猫の大きさが元の子猫

になった
「こんなもんか？」
『ですね』
「それじゃあ…っと」
ライトは事情を聞くために金髪の少女の元へ行こうとする
「あのさ…聞きたいことが…「それを返して！！」のわっ！？」
しかし茶髪の少女が砲撃を乱射してきた
「ちょ…まっ…これじゃ…近づけない…とぉ！！？」
『ここは一時撤退した方が良さそうです』
「でも…あの子が…あれ？」
『どうやら撤退したようですね』
「はや！！」
『マスター！』
「わかったよ！！」
ライトは砲撃を上手く避けながらその場から逃げた

※※※※※※※※※※※※
「ハァハァ…逃げきったか？」
『反応はありません』
「何なんだよ…アイツ…あれじゃ白い悪魔だよ…」
『ＭＳですね。わかります』
「もびるすーつ…？なんだそれ？」
『お気になさらずに。それよりもこれからどうします？』
「ん～あの金髪の女の子を探して戦ってた理由を聞こうと思うんだけど…」
『白い方には聞かないんですね』
「悪魔だからな」
『なるほど…』
「それにこれについても聞かなきゃならないし」
ライトはポケットから先ほどの青い石を取り出した

『もの凄い魔力が感じられます』
「こんな危険なものを集めてる理由がきになるし」
『それで？理由を聞いてどうするんですか？』
「手伝えたらいいな～って思ってる」
『良いんですか？彼女が必ずしも良い行いをしているとは限らないんですよ？それにあなたの記憶はどうするんですか？』
「そこは大丈夫。悲しそうな表情してたけど、あの目は優しい奴の目だった。それに記憶は意外な事で戻るかもしれないし…それだったら記憶よりも目に見える事をやりたいんだ」
『…わかりました。しかし彼女を探す方法は考えてあるのですか？』
「あっ……忘れてた」
『ハァ…まったくあなたは…しょうがないですね…私も確証が無いのですが、ここからかなり離れた場所に結界の反応があります。おそらく彼女はそこにいるのかと思います』
「なに？本当か！？なら今すぐ行くぞ！！」
『ちょっと待ってください』
ライトは勢いよく飛ぼうとしたがデスティニーによって止められた
「なんだよ…」
『どうせ行くなら転移魔法の練習をしながら行きましょうよ』
「ん～そうだな。でもどうするんだ？」
『転移座標の設定は私がしますから、魔力を込めてください』
「よしわかった！いくぞ…転移！！」
ライトは転移魔法を使って金髪の少女の元へ向かった

第二話　桃色の砲撃と黄色の閃光　　この人達は本当に子供ですか？（泣）（後

作者「……m（＿＿）m」
ライト「いきなり無言で土下座してどうした？」
作者「いや…ちょっと二点ほど変更するから前もってお詫びを…」
ライト「二つもか！？…んでその部分は？」
作者「まず一つ目は少しでも読みやすくするためにあとがきと同じく、本編の「」部分の前に名前を入れようと思います」
ライト「なるほど…誰がなに言ってるかわかるようにするためだな」
作者「これは次回からしようと思います。そしてもう一つ…ライトの性格をお気楽バカからマイペースにします！！」
ライト「はぁ！？性格をいきなり変えるのかよ！！」
作者「だって…今後の内容考えてたらお気楽バカなんて書けなかったんだよ…」
ライト「所詮お前はその程度の人間だったということだ」
作者「ぐっ…心が痛い…」
ライト「それじゃあオリキャラ設定も書き直すんだな？」
作者「いや～内容かえたらあとがきも変えなきゃいけないからしばらくは無しの方向で…」
ライト「な　お　す　よ　な　？」
作者「はい…いつか必ず」
ライト「まったく…」
作者「本当にすみませんでした！」
ライト「あと…あれは原作キャラは出たといえるのか？」
作者「まぁ…ライトから見てまだ知らないわけだしね。次回にはちゃんと出せるよ」
ライト「…まぁいいか」
作／ラ「「それでは！！」」

第三話　協力　　ドラえもんって昔は黄色だったんだね。この間知ったよ（前

第三話です

ようやくできた…（疲）

第三話　協力　　ドラえもんって昔は黄色だったんだね。この間知ったよ

とあるマンション

金髪「ハァ……」

金髪の少女ーフェイトはため息をついていた。理由は二つ　一つはジュエル・シードを回収出来なかった事、そしてもう一つは不意打ちから守ってくれた自分と同じ位の少年である

フェイト「（なんで私守ってくれたんだろ…）」

赤い狼「フェイト！そんなにクヨクヨしないでさ！次があんだろ次が！」

フェイト「アルフ…そうだね…」

アルフ「それともいきなり現れた男の方が気になるのかい？」

フェイト「…なんで助けてくれたんだろって…」

アル「ふ～ん…」

そしてしばらく沈黙した空気になった。

しかしその沈黙を破るように銀色の魔法陣が部屋に広がった

フ／ア「「！！？」」

そしてそこから現れたのは…

ライト「うわぁ…気持ち悪い…」

※※※※※※※※※※※※

ライトｓｉｄｅ

ライト「うわぁ…気持ち悪い…」

デスティニー『酔ったんですね。いきなり魔力を全開で流すからそうなるんですよ』

ライト「うるさいな…仕方ないだろ…初めてなんだから……あっ…

いくらかマシになってきた」

それにしても…これ…どこの部屋？ちゃんとあの子のところに着いたんだろうか

フェイト「あの…」

ライト「ん？あぁ…よかった、ちゃんと着いたんだな」

いや～よかったよかった。これでまったく知らない人だったらものすごく気まずくなるから…

アルフ「おい！お前どうやってここにきた！ここは結界を張ってるんだぞ！」

うるさいな…猫耳（？）女

ライト「普通に転移してきたぞ？」

アルフ「座標もわからないようにしてるのに！？」

デス『妙な結界反応の中心を座標にしました』

フ／ア「「！！？」」

お～見事に固まったな

アルフ「そんな…アタシが張った認識妨害の結界がデバイスに破られるなんて…」

デスティニー『高性能ですから』

ア「……（泣）」

あ～あ猫耳女泣いちゃったよ

ライト「あまり人弄りすぎるなよ」

フェイト「…あなたはどうしてここに？」

そうだった…忘れてた。最近もの忘れ酷いな…

デスティニー『マスターの場合は物忘れの域を超えてますがね』

ライト「うるせぇほっとけ。それよりもここに来た理由だったっけ？話がしたいと思ってな」

フェイト「私と…？」

ライト「あぁ…どうして一人で…猫耳女もいたな。二人でこんな物を集めてるのかなって」

フェイト「それは…」
ライト「これは封印しててもわかる。この石には膨大すぎる魔力が込められてる。そんな代物を女二人で何故、危険を侵してまで集めてるんだ？」
アルフ「そんなこと言える訳無いだ…」
フェイト「アルフ！…この人なら大丈夫かもしれない」
アルフ「でも…」
フェイト「大丈夫だから」アルフ「わかったよ…」
猫耳女をフェイト…だったっけ？が宥めてる。猫耳女が保護者じゃないのか？
そしてフェイトは自分達が集めている理由を話してくれた
ライト「母さんのため…か。なるほどね」
フェイト「うん…私は母さんの役にたちたいの」
ライト「……わかった。俺も協力するよ」
フェイト「え！良いの！？」
ライト「ダメか？」
フェイト「う…ううん…ありがと。でもどうして？なんで手伝うなんて…」
ライト「人を助けるのに理由がいるのか？」
フェイト「え…その…」
フェイトが何故か戸惑い始めた
ライト「ん～理由が必要か…なら俺が手伝いたいから、でどうだ？」
アルフ「そんなの信じられるわけないだろ！」
ですよね…どうしたら…あっ！あれあげよう
ライト「だったらこれ渡しておくよ」
そういって青い石を渡す
アルフ「よし！信じよう！」
ライト「かるっ！」
まさか…ここまで軽いとは…
ライト「フェイトは？」

フェイト「私は…手伝ってくれるんだったら良いよ」
ライト「そっか、これからよろしく」
そう言ってニコッと笑った
フェイト「ぁぅ…よ…よろしく／／／」
ライト「??　フェイト顔赤いぞ?風邪か?」
そう言ってフェイトに近づこうとすると
フェイト「う…ううん！大丈夫！風邪なんかじゃないから！！／／／」
ライト「そうか?なら良いけど…体には気をつけろよ?」
フェイト「うん！わかった！」
フェイトがなんかおかしくなったけど…これって気にしたら負けなのかな?
アルフ「そういえば名前聞いてなかったね」
ライト「そういえばそうだな」
忘れてたな〜
デスティニー『マスターは最近歳でしてね…』
ライト「なあ…ドライバーってある?」
アルフ「ちょっと待ちな…たしかここに…」
デスティニー『ちょ…マスター！冗談…冗談ですってば！！』
デスティニーが慌ててるよ（笑）
だがデスティニーには…
ライト「落ち着けデスティニー…お前にネジらしいものがあったか?」
デスティニー『あっ…！』
デバイスのクセに自分の事がわかってないとはな…あれ?それじゃデスティニーはどうやって出来てんだろ?
まぁ…いっか♪
ライト「んで…名前だったな。俺はライト・レイフォールだ」
アルフ「アルフだよ」
フェイト「フェイト・テスタロッサです…／／／」

フェイトはまだ元に戻ってなかったか…

ライト「と…とにかくこれからよろしくな！」

これから楽しみだな！…一部不安だけど…

第三話　協力　　ドラえもんって昔は黄色だったんだね。この間知ったよ（後書きのコーナー！）

作者「ハイ！後書きのコーナー！」
ライト「なんだよ…いきなり」
作者「何となくに決まってるだろ」
ライト「黙れ適当人間」
作者「ウフフ…流石の私もそこまで言われたら泣いちゃうよ～」
ライト「（無視）今回もグダグダで跳躍し過ぎだな」
作者「無視か！！まぁいい…それにフェイトサイドだしね」
ライト「なぁ…キャラ崩壊がだいぶ酷くないか？」
作者「まだ軽い方じゃね？」
ライト「それに途中からフェイトの顔が赤くなっておかしくなった気がするし…」
作者「（こいつ…鈍感か！？）た…たぶん気のせいだろ」
ライト「そうか？」
作者「気にしたら負け！！次回は…少し時間を飛ばして温泉になります」
ライト「なんか流された…温泉か…飛ばし過ぎてないか？」
作者「いや～記憶がうろ覚えでさ…間になにがあったか覚えてなくて…あれ？ライトくん？なんでセットアップしてデスティニーを逆手に持ってるの…？」
ライト「レッツ粛清タイム♪」
作者「ちょ…それいずれ出そうとしてた技！！」
ライト「アイン・ソフ・アウル！！」
作者「ギャァァァァァァス！！」
ライト「ふぅ…作者は星になりました。それではまた次回♪」

第四話　湯の町の戦い　温泉って普通火山の近くにあるよね？　海鳴って火山

第四話です

時間がかかり過ぎました…

第四話　湯の町の戦い　　温泉って普通火山の近くにあるよね？　海鳴って火山

ライトがフェイト達に協力し始めてから数日後…

ど～も～ライトです。
今、作戦会議って言うか捜索場所の話し合いをしてます。
ん？この数日間どこに居たって？
この部屋を拠点にジュエル・シードを探してましたよ
何でこの部屋を拠点にしてるのかって？
決まってるじゃないですか…

フェイトに無理やりですよ
あの話の後出て行こうとしたらフェイトに「帰るの？」って聞かれて「公園か何処かで適当に野宿する」って言ったら「野宿！？ダメ！！ダメ絶対！！帰るとこ無いならここにいて」って言われました…おとなしそうな人ほど怒ると恐いと言う意味がわかりそうな気がしましたよ…
長くなりましたね。後日談終わり！！

「温泉？」
俺はフェイトに聞き直した
「そう。あの近くはまだ探してないからね」
「温泉…」

「あっ…そう言えば記憶喪失だったね。温泉ってのは…」

アルフ（猫耳女って言ったら怒られました）が温泉について説明しようとしてきた

「たしか火山エネルギーで暖められたお湯の事だろ？」

「え？何で知ってんの？」

「何でだろな（笑）」

何故かそういうどうでも良いことは覚えてんだよな…

『“ご都合主義”ですね。わかります』

デスティニーの言葉はスルー

「それで？今から行くのか？」

「うん」

俺の質問にフェイトは普通に答えた。

この前の異常は何だったんだ？

「その前に皿を片づけないと…」

俺は三人分の朝食の皿を片付ける

「ライトって…主夫みたいだな…」

アルフうるさいぞ！
元々はフェイトがコンビニ弁当かウ〇ダーとかの軽いものしか食べてないが原因なんだよ！！

そんなこんなで時間を飛ばして海鳴温泉

「湯気がすごいね」
「ちょっとすごすぎじゃないかい？」
「何も見えん…」
上からフェイト、アルフ、俺で率直な感想を言った

「んで？」
「んで？…とは？」
アルフ…疑問を疑問で返されても…
「いや…どうやって探すんだ？」
「ジュエル・シードは魔力の塊だからね。ジュエル・シードのちょっとした魔力を感知しながら探すの」
「へ～」
フェイトさん説明ありがとうございます

「それじゃさっさと始めようか」
※※※※※※※※※※※
5分後…
「疲れた〜」
「まだ数分しかたってないじゃないか」
「うるさいぞアルフ、疲れるモンは疲れるんだ」
「あはは…」
※※※※※※※※※※※
更に数十分後
「幾らか場所がしぼれてきたね」
「腰痛ぇ…」
「爺臭いよ…」
俺が腰をパキパキ言わせながら背伸びをしていたらアルフがなんか言ってきた
『マスターはだいぶ歳で…「デスティニー？」すみませんでした！！」
なんかこのやり取りに馴れてきたな

「あはは…んでフェイト？動くのは夜だよね」
「そうだよ…あの子も来るのかな…」
「そりゃ来るだろうよ。アイツらもジュエル・シード集めてんだからな」
「うん…でも…」
「戦いたくないのか？」
「できることなら…」
珍しくフェイトが弱音を吐いてるな。でも…
「残念だけどアイツらそこの宿に来てるよ」
「「えっ！？」」
この様子からすると気づいてなかったのね
「いつ気づいたんだよ！」
アルフがいきなり胸ぐらをつかんで前後に振り出してきた
「さっ…き…探し…てた…ら…くる…ま…からおり…てくる…のがみ…えた…ウプ…」
ヤバ…気持ちわる…
「アルフ！止めて！ライトの顔が青くなってるから！」

「へ？あ…」

アルフがいきなり手を離した。死ぬかと思った…

「殺す気か…」

「ごめんごめん」

「まったく…」

「戦わなきゃいけないんだね…」

「大丈夫だろ。俺やアルフもいるから」

「そう…だよね？」

「何故疑問形？」

「あっごめん…」

あれ？慰めたつもりなのに逆に落ち込ませた…？

そんな事していたらアルフがなにか言い出した

「良いこと思いついた！！アタシがその子を見てきてやるよ！」

…なにを言い出すのかと思えば…

「アタシがその子の力を見極めてくる！」

「無理だろ」

「なんでさ！（泣）」
「人を見極める程の目が無いだろ」
「いや！アタシだってそれぐらいは…」
はぁ…とかなんとか言っておいて…
「本当の目的は温泉だろ」
「ギクッ…」
図星か…
「ジュエル・シード探しはどうすんだ？」
「いや…ほら…温泉はその子を見たついでで…」
「いいよ」
「なっ…」
「本当！？フェイト、ありがとー！」
すぐさまアルフは宿の方へ飛んでいった
「いいのか？」
「うん…アルフはアレでも人を見る目はあるから」
「ジュエル・シード探しは？」

「私達だけで大丈夫だよ」
「アイツ…絶対温泉目当てだぞ？」
「ちょっとした休みって事で…」
「日頃から全く休んでない人が言う事か？」
「ぁぅ…ごめんなさい」
おっと…話が長くなったな
「フェイト、さっさと再開するぞ」
「うん！」
※※※※※※※※※※
「…！ライト～！あったよ！」
「お！ほんとうか？」
アルフが白いのを見に行って数十分後、ようやく見つけた
「うん、そこの池に。」
「やっとか…」
「それじゃアルフに念話で…」
（あ～あ～、フェイト～ライト～？聞こえる～？）

フェイトがアルフに念話で伝えようとすると逆にアルフから念話がきた

「（うん、聞こえるよ。どうしたの？）」

（白い子をみてきたよ～）

「（どうだった？）」

（はっきり言ってフェイトの敵じゃないね～）

「（そう…）」

「（かなりはっきり言うな）」

（しょうがないじゃないか、本当なんだし）

「（お前の目が確かならな）」

（まだその話続いてたのね…そんな事よりジュエル・シードは？）

「（見つけたよ。予定通り夜に動こう）」

（さっすがアタシのご主人様♪）

「（俺も探してたんだが？）」

（ついでにライトも）

ついでか…俺はついでなのか…

「（ライトが落ち込んじゃったよ…）」

（じょ…冗談だってば、冗談…）

「（まったく…）」

（それじゃ…）

「（うん。夜に落ちあおう）」

（りょうか～い）

アルフの念話が切れた

「アルフに連絡する手間が省けたな」

「そうだね。ライトは夜までどうする？」

「寝ます」

「そ…そうなんだ…」

「おう。おやすみ」

俺は人目につかなそうな木に登って眠った

※※※※※※※※※※※※

数時間後　　夜

「起きろ！」

「グハッ…」
寝てたのに鳩尾を殴られて意識が戻った
「ゲホッ…何するんだよ…アルフ」
「いくら起こしても起きないから力任せにやらせていただきました♪」
人を起こすのに鳩尾って…
「お前…人の起こし方は他にもあるだろ…」
「いや～ライトがなかなか起きないからさ」
「だからと言って鳩尾は…もういい、それよりフェイトは？」
「フェイトならジュエル・シードのところに…」
アルフが後ろの方に指をさした瞬間光の柱が建った
「アルフさん…あれは？」
「たぶん…ジュエル・シードの光だと…」
「……」
「……」
しばしの沈黙がおとずれた

「「急げぇぇぇ！！」」

ライトとアルフは慌てて光のもとへ向かった

「ヤバいよ！完全に遅刻だ！！」

「わかってる！！」

そして二人が現場に着くと同時にジュエル・シードの光は治まった

「あれ？二人とも遅かったね」

「わ…悪い…寝坊…した…」

「そ…そうなんだ…もう封印は終わったよ」

よかった…フェイトに怪我は無かったみたいで…

「あっ！！」

「ん？」

後ろから声がしたため振り返ると白いのがいた

「おやおや…よい子はお家で大人しくしてなって言わなかったかな？」

アルフが狼形態になった。

「あいつ、使い魔だ！」

フェレットが何か叫んでる

「なのは！ジュエル・シードを奪い取らないと！！」

「うん！」

「させるとでも思ってるのかい！？」

「させてやるさ！！」

アルフが白いのに飛びかかって行くとフェレットの足元から魔法陣が広がり自分とアルフを転移させてしまった

「お～アルフが消えた」

「転移魔法…良い使い魔を持ってるね」

「ユーノくんは使い魔ってヤツじゃないよ！友達！！」

白いのは杖をこちらに向けてくる

「ッ…」

フェイトもそれを見て身構えるが…

「フェイト…先に帰ってろ」

「え？どうして…」

「今回は俺が戦う」
「で…でも…」
いきなりでフェイトが戸惑っていた
「寝坊した分だよ。俺の事は心配いらないから」
「……」
フェイトは少し考えて…
「わかった…じゃあ…」
フェイトは先程封印したジュエル・シードを渡してくれた
「わかった…増やしとくよ」
「うん！それじゃ…怪我しないで…」
そう言ってフェイトは暗闇に消えた
「さて…それじゃ白いの！お互いのジュエル・シードを1つづつ賭けて勝負しようぜ」
「なっ…！私白いのじゃないよ！なのはだよ！高町なのは！！」
「うるさいな…叫ばなくても聞こえてるのによ…」

「ひ…ヒドい…（泣）」

うぇ？半泣き！？

「だぁぁ！悪かった！悪かったから泣くな！！」

「ぐす…あなたの名前は…？」

「お…俺はライトだ。ライト・レイフォール」

「わかったよ。ライトくん！ジュエル・シードを賭けて勝負！！ディバインバスター！」

え？もう始まってるの？これ？しかもいきなり砲撃！？

「うぉぉい！？」

「あっ…！」

俺は砲撃が当たる前に空に逃げた

「あぶねぇ～初っぱなにやられるかと思った…」

下を見るとなのははまだ地上にいた

「それじゃ…今度はこっちだ！デスティニー！モード・ファング！」

『ファングモード』

俺はデスティニーを少し小さめの二丁の銃剣にした

「増えた！？」

「これでも食らえ！」

なのはの真上から二丁になったデスティニーの魔力弾を乱射した

「にゃぁぁぁ！」

なのはは足から羽を出して避けている…猫みたいな鳴き声とともに…

「逃げているだけか？なのは」

「そんな事ないけど…」

「その程度だったらフェイトには到底追いつけねぇよ！」

「！！」

ちょっとした挑発をしてみたらすぐに目の色が変わった

「ディバインバスター！！」

「おっと…」

先ほどのより強力そうな砲撃だったが軽く避ける

「良いじゃねぇか！」

「はぁ…はぁ…」

「もう体力切れか？しょうがないな…」

「え！？」

俺は高速でなのはの後ろに回り込んで首筋にデスティニーを近づけた

「俺の勝ち」

『ｐｕｔ　ｏｕｔ』

「レイジングハート！？」

俺が勝ちを宣言するとなのはのデバイスがジュエル・シードを一つ出した

「いい奴だな…んじゃジュエル・シードはもらって行くぞ」

「あ！ちょっ…」

なのはのデバイスからでたジュエル・シードを掴んで俺は空に飛び上がった。途中なんか言ったみたいだけど無視してフェイトのマンションに帰った

…ところでアルフは何処行ったんだろ

第四話　湯の町の戦い　　温泉って普通火山の近くにあるよね？　海鳴って火山

作者「……ｏｒｚ」

ライト「また土下座かよ…今度はどうした？」

作者「時間かけたクセに駄文しか出来なかった…」

ライト「知らなかったのか？最初から駄文だよ」

作者「グハッ…」

ライト「今回は戦闘入れたみたいだけど短かったな」

作者「限界を感じたんです！！」

ライト「いばるな！！」

作者「ぎゃぁぁぁ！！」

ライト「片づいたか…それでは！！」

第五話　蘇る記憶　　ピカチュウって、何で尻尾の根元だけ茶色なんだろう（前）

第五話です

時間がかかり過ぎました…

第五話　蘇る記憶　ピカチュウって、何で尻尾の根元だけ茶色なんだろう

白いの…もといなのはと戦いました。軽く倒したらジュエル・シードが増えました。少し面倒だと思いました。

…作文！？　　ｂｙライト

「ん…もう朝かよ…眠い…」

ライトは朝日で目が覚めた

ちなみにライトはフェイトのマンションにあるソファーで寝ている

「デスティニー…今何時？」

『午前八時です』

「もう一眠り…」

「起きろ！！」

「グハッ…」

もう一度寝ようとしていたライトの腹に拳が入った

「その起こし方止めろ…腹が…保たない…」

「え～腹が鍛えられてんだから良いじゃん。」

「良くないわ！！」

『やれやれ…この光景にも慣れましたね』

「「お前が言うな！！」」

『サーセンw』

「おはよう～」

フェイトが目を擦りながら入ってきた

「フェイト！」

「フェイト、起きてたのか」

「二人が騒いでたからね」

「フェイト、二人じゃなくて二人と一機だ」

「ライト…そこは別に訂正しなくても良いんじゃない？」

「そうか？でもこの騒ぎにはデスティニーもいたわけだし…」

『サテ…ナンノコトヤラ』

「オイコラテメェ、へし折るぞ」

『フッ…マスター程度にへし折られる私ではありませんよ』

「へぇ…そうか」

ライトは腕からデスティニーを外し潰して握りだした

「ライト…止めておいた方が…」

「まぁ見てろよ。フェイト」

ライトが手に力を入れだした

『ふっ…マスターもそのてい…あれ？何だか嫌な音が…ちょっ…タンマ！ミシミシ言ってる！お願いしますから止めてくださいいいい！！』

ライトは潰すのを止め腕に付けた

「俺にケンカ売るからだ」

『すいませんでしたマスター！一生ついていきます！！』

「よし！」

「（ねぇアルフ…これ何？）」

「（アタシにもわからないよ…）」

「ッ…！」

フェイト達が念話で話しているとライトがいきなり後ろに振り返った

「ライト？」

「どうしたの？」

「あっ…いや…何でもない（何だったんだ？今の感覚）」

「「？？？」」

そんな事をしながら時間も過ぎ、昼頃

ビル屋上

「……」

「ねぇライト…見つかりそう？」

「ちょっと待ってろ…」

ライトは捜索魔法でジュエル・シードの僅かな魔力を探っていた

「う～ん…それらしい魔力は感じられるけど、決定的って感じじゃないんだよな」

「そっか…」

「それにしてもよく広域に捜索魔法使って魔力保つね」

「デスティニーの話だとＳＳ＋位あるらしいけど…」

そういうとフェイト達は引いていた

「な…なんで離れてんだよ…」

「アンタ…ホントに人間？」

「どういうことだ？」

「その歳でＳＳ＋って高すぎるよ…」

「フェイトでもＳランク無いのに…」

「俺ってホントに異常なのね…」

『突然変異って事でｗ』

「何故お前は笑ってんだよ」

『何となくですｗ』

「そうか…とりあえず笑うのを止めろ」

『サーセンｗ』

「でもいくらＳＳ＋あっても疲れるでしょ？」

「ん～まぁそうだな…だから封印とかそこら辺は今日はパスで」

「りょ～かい」

「ライト…キツかったら休んで良いからね？」

フェイトは心配そうに言ってきた

「大丈夫　誰かと違って休む時に休んでるから」
「うぇ！？」
「確かにね」
「ア…アルフまで…私大丈夫なのに」
『その顔色で…ですか？』
「うぅ～」
「後は俺がやっておくから見つかるまで帰って寝てろ」
「だから私は大丈夫だって…」
「アルフ…レッツゴー」
「了解！」
アルフがフェイトを抱き上げた
「ちょ…アルフ！？主人は私だよね！？」
「だからアタシはそのご主人様の為に動いてるんだよ」
「つーわけでさっさと帰って寝ろ」
「降ろして～！」

フェイトは叫びながらもアルフに連れて行かれた

「ふぅ…お姫さまにも困ったもんだな」

『全くです』

ライト達はそんな事を言いながらジュエル・シードの捜索を続けた

「なぁ…デスティニー」

『なんでしょうか？』

「今日はなんか変じゃないか？」

『どういうことですか？』

「何というか…いつもと感覚が違うみたいな…」

『そうですか？私には感じられませんが』

「気のせいかな…」

『というより私はデバイスなのでそこら辺はわかりませんw』

「あ～そういえば」

『私はデバイスですよ？機械ですよ？機械に人の感覚が真似できると思ってるのですか？』

「うるさいな…お前がグダグダ喋るから忘れてたんだよ。少しはフェイトのバルなんとかを見習えよ」

『バルディッシュですね。ではマスター、私が急に話さなくなったらどうします？』

「……それはちょっと寂しいな」

『そうでしょう？今がちょうど良いんですよ』

「そんなもんか？」

『はい』

気がつくと太陽が傾きかけていた

「もう夕暮れか…」

『結局見つけられませんでしたね』

「ある程度の範囲がわかったんだから大丈夫だろ」

『それもそうですね。フェイトさん達に連絡しますか？』

「いいや、しなくていい。来たから」

ライトが日が沈みかけの空を見上げるとフェイトとアルフが向かって来ていた

『本当ですね』

「ライト！」

「よう。ちゃんと休んできたか？」

「アタシが無理やり寝かせたから大丈夫だよ！」

アルフが親指を立ててきた

「私が寝るまでずっと監視してるんだよ…」

『「あ～」』

「な…なんだい？」

『「別に～」』

「そ…そんな事よりもジュエル・シードは？」

「そうだったな」気がつくと周りはすでに真っ暗になっていた

「この辺りって所まではわかったんだけどね」

「あ～こんなに人がゴミゴミしてたら探すのも一苦労だわね」

「しょうがないよ…少し乱暴だけど魔力弾を打ち込んで強制発動させよう」

「あ～それはアタシがやる！」

「アルフ？でもこれ疲れるよ？」
「そうだぞ？大丈夫なのか？」
「長時間広範囲に捜索魔法使ってた人に言われたくない」
「うぐっ…」
「それにアタシを誰の使い魔だと思ってるんだい？」
「そうだったね」
「まぁ…確かにな」
「それじゃ…いくよ！」
アルフは足元に魔法陣を出し拡散する光を打ち上げ同時に広範囲に結界魔法をつかった
すると強制的に発動されたジュエル・シードが現れた
「ふぅ…それじゃフェイト、後よろしく」
「わかった」
「なのはが来るかもしるないからな」
「なのはって？」

「あの白いのだよ。アイツも集めてんだから来るだろ」
「その時はフェイトが蹴散らすさ！」
「じゃあ行くね」
「あっ！あと」
「？」
「嫌な予感がするから気をつけろ」
「うん」
フェイトはそのままジュエル・シードのもとへ行った
「それじゃアタシもフェレットと遊びに行きますかな」
「そっか、んじゃ足止めよろしく。俺はここで見てるから」
「あいよ！」
アルフもビルから飛び降りた
それと同時に激しい光が出た
『ジュエル・シードが封印されました』
「そうか…」
『フェイトさん達以外の魔力反応…なのはさん達もいるようです』

「……」

『マスター？』

「あ…！？いや大丈夫」

『そうですか？』

「ああ…（なんでだ…なんで嫌な感覚が増えているんだ？）」

「フェイト！話さなくていい！！」

「！？」

ライトが考え事をしているとアルフの声が響いた

「そんな優しい人達の周りでぬくぬく暮らしてきた奴に言わなくていい！！アタシ達の最優先事項はジュエル・シードの捕獲だよ！！」

アルフはフェイトに言い放った

「くっ…」

フェイトは顔に苦渋の色を見せ一時的になのはとの戦闘を止めてジュエル・シードのもとへ向かった

「あっ…」

それに反応したなのはもジュエル・シードのもとに向かった

「俺達も行くぞ！デスティニー！！」

ライトもジュエル・シードのもとへ飛んだ

『マスター！一体どうしたんですか！？』

「この後なにかが起こる…！」

『まさか…それがマスターの言ってた嫌な予感ですか？』

「そうとしか考えられない！」

ガキン…

「なっ…」

「えっ…」

同時に二人のデバイスがジュエル・シードにあたりデバイスにヒビが入った

「クソッ…」

その後ジュエル・シードから放たれた凄まじい衝撃波が辺りを襲った

「きゃぁぁぁ！」

「くっ…」

「なっ…ぐ…うぅ…」

なのはとフェイトはジュエル・シードの威力に耐えきれず吹き飛ばされライトは何故か頭をおさえだした

『マスター！どうしたんですか！？』

「頭が…割れ…る…なにか…おもい…だせ…」

その時ライトの頭の中では幾多の景色が凄い速さで流れていっていた

「（なんだよこれ…記憶…？俺は…俺は…）」

『マスター！！』

「！！」

ライトはデスティニーの叫び声で意識が覚醒した

『早くジュエル・シードを止めなくては！！』

「…ああ！わかってる！！」ライトは目つきを変え銃剣であるデスティニーを逆手に構えて一気にジュエル・シードとの距離を縮めた

「止まりやがれ！アイン・ソフ・アウル！！」

ジュエル・シードにライトの放った黒い光が当たると火柱が立ち上った

「ライト！！」

「フェイト！危ない！！」

「でもライトが！！」

そして火柱が消えるとライトがジュエル・シードを掴んで立っていた

「やっと…とまっ…」

ライトはドサッと地面に倒れた

「ライト！！」

フェイトはすぐにライトに駆け寄る

「ライト！ライト！！」

「フェイト、早く連れて帰ろう」

「う…うん」

アルフはライトを担ぐとなのは達を睨み夜空に飛んでいきフェイトはそれについて行った

第五話　蘇る記憶　　ピカチュウって、何で尻尾の根元だけ茶色なんだろう（後

ライト「……（無言で鞭を装備）」

作者「……（無言で正座）」

ライト「何が言いたいのかわかるよな？」

作者「ハイ…」

ライト「それじゃ…何で1ヶ月間ほぼ放置状態だったのか訳を聞こうか」

作者「理由は二つでｓ「言い訳なんて聞きたくないわ！！」イタァァァ！？」

作者「何で！？何で言い訳聞くって言ってたのにいきなり鞭で打つの！？」

ライト「俺は訳を聞くと言ったが言い訳を聞くとは言ってない！！」

作者「理不尽だ…（泣）」

ライト「しょうがない…手短に言えよ」

作者「わかりましたよ…一つ目は入院してました」

ライト「何でだよ」

作者「熱中症ですw」

ライト「はぁ！？」

作者「いや…夏休みに実家に帰って家の事手伝ってたら急に目の前が真っ暗になっちゃってw」

ライト「笑い事じゃないし…それ以前によく生きて帰ってこれたな」

作者「悪運だけは誰にも負けない！！」

ライト「そこは威張るとこじゃない」

作者「んでもう一つはですね…小説のストックが消えちゃった♪」

ライト「消えちゃった♪…じゃねぇ！！キショイわ！！」

作者「ひ…ひどい…ストックが無いから1から作り直したのに…」

ライト「とりあえずお前の根性を叩き直す」

作者「へ！？ちょ…小説書かないと何時になるかわからないからパ…」

ライト「お前に拒否権は無い。小説の方は少しくらい待ってもらえ」

作者「いやいやいやいや！それは無いでしょ！」

ライト「ではこれから少し遅くなりますがちゃんと更新させませんで。それでは！！」

作者「ちょっと！勝手に終わらせないで！って襟を引っ張るな！お願いしますから！！ギャァァァァァァ！！！」

第六話　管理局

映画の時のジャイアンの優しさは異常（前書き）

覚えてる人いるかな……？
久々更新６話です

第六話　管理局　　映画の時のジャイアンの優しさは異常

「あれ…？ここは…」

ライトは燃えている研究所のような建物の前にたっていた

「なんだよ…これ…」

足下にはまだ幼い子供の焼死体がたくさん転がっている

「誰がこんな…！？」

前を見ると小さな子供を抱きかかえている男がいた

「まさか…アイツが！」

すると男は子供を抱きかかえたまま何処かへ行こうとした

「ちょっと待てよ！」

ライトは走ってその男を追いかけたが、男はそのまま転移魔法でどこかへ消えてしまった

「はぁ…はぁ…クソッ……あの男…どこに…あ…れ…？」

ライトが立ち止まると急に力が入らなくなり、地面に倒れてしまった

「（力が…はいらねぇ…）」

目の前が徐々に暗くなっていく

（彼らに気をつけて……）

「（！…だれ…だ？）」

突然誰かの声が聞こえたが、完全に意識を失ってしまった

「ぅ…」

気がつくと、そこはフェイトのマンションだった

「あれ…夢？」

『おはようございます。マスター』

「デスティニー…」

『気分はどうですか？』

「…あぁ、まあまあかな」

ライトはデスティニーの質問を素っ気なく返した

「（夢…にしてはリアルだったな…あの男…それに最後の声は…）」

「おっ！起きたのかい？」

「んぁ？」

考えているとアルフが入ってきた

「一時はどうなるかと思ったよ。全身大火傷で」

「火傷？」

体中を見るとメチャクチャに包帯が巻かれていた

「…こりゃひでぇな（汗）」

「あはは…それフェイトが巻いたんだよ」

「フェイトが？」

「うん。帰ってきてからアタシが包帯を巻こうとしたら、フェイトが、私がするって言ってさ」

「それで顔以外ミイラ男状態な訳だな…」

「うん…」

「それで、フェイトは？」

「そこにいるよ」

アルフが指さした方向を見ると、毛布にくるまって寝ているフェイトがいた

「一晩中アンタの看病するって言ってさ」

『いつの間にか眠ってましたけどね』

「そっか…」

何故か急にしんみりした空気になってきた

「…この寝顔を見てたら思うんだよ。何故ジュエル・シードなんて物を集めさせてるんだろうって…」

「あ～俺も、こんな女の子のどこに砲撃を撃つ魔力があるんだろうって思うよ」

その瞬間アルフが勢いよく振り向いた

「な…なんだよ、そのジト目は」

「アンタに人のことが言えるのかい？」

「どういう意味だ？」

「半径何キロにも長時間捜索魔法使うなんて普通じゃありえないんだよ！？」

「え！？アルフだって頑張れば出来るんじゃねぇの？」

「出来るわけないだろ！？あんな事やったら軽く死んじまうよ！！」

「これって致死量超えてんの！？」

「アンタの魔力量がおかしいんだろ！？」

『あの～お二方？』

「「なに！？」」

『静かにしないとフェイトさん起きてしまいますよ』

「うっ…」

「…そうだね」

しばらく騒いでようやく気がついた二人

「うう…ん…」

『「「あっ」」』

だが遅かった

「あれ…？ライト！？」

「よ…よう」

「ライトォォォ！！」

「！！？」

フェイトが急に抱きついてきた

「よかった…よかったよぉ…」

「あ…ああ」

「死んじゃったかと思ったんだからね…？」

「ごめん…」

「あのさ…フェイト…ライト」

『いやぁ～お熱いですねぇw』

「うぇ！？あ…／／／」

フェイトは自分の行動を思い出し、赤面した

「なぁアルフ…お熱いってどういう意味だ？」

「知らないなら知らないままの純粋なアンタでいておくれ…お願いだから」

「？？？」

「ね…ねぇライト／／／」

少し立ち直ったフェイトが話しかけてきた

「ん？どうした？」

「普通に体動かしてるけど、火傷とか大丈夫なの？」

『たしかに…さっき普通にアルフさんと言い争いしてましたしね』

「余計な事は言わなくていいよ」

すぐにアルフはデスティニーにツッコミをいれた

「そういえば痛みとか無いんだよな…」

ライトは数回腕を回した後、包帯に手をかけた

「めくるぞ…良いな？」

「う…うん」

『ドキドキ…』

「どうでもいい事はしなくていいから早くしてよ」

「ノリ悪いな～アルフは」

ライトは少し文句を言いながら包帯をめくった。

するとそこには…

「傷が…無い？」

包帯の内側は何事も無かったかのように傷痕一つ無い腕だった

「じゃあ…」

ライトは上半身の包帯もとった。

しかしそこも傷痕一つ無かった

「なんで…？」

「アルフ、俺に治癒魔法かけたか？」

「かけるにはかけたけど…完治するほどはかけてないよ？」

『謎ですね～w』

「テメェは何にも考えてないだろ」

『……嫌ですね～そんなわけ無いじゃないですか～』

「今の間は何だ！今の間は！！」

『それよりもフェイトさん達は何か用事があるのではないですか？』

「話を急に変えるな！！」

「そうだった！アルフ、すぐに行こう！！」

「わかったよ…」

「どこかに行くのか？」

「うん、今日は母さんに途中報告に行く日なんだよ」

「へぇ～フェイトの母さんにね…どんな人なんだ？」

「…とっても優しい人だよ」

「ッ！」

フェイトがそう言うとアルフの顔が険しくなった

「どうした？アルフ」

「んぇ！？な…なんでもないよ！」

「そうか…？」

「ねぇ？ライトも来る？」

「俺は…今回は良いや。傷がいきなり治ったから何が起こるかわからないし」

「そうだね。元怪我人はおとなしくしときな」

「なんかバカにされた感じ…」

それから少し経って、マンション屋上

「お土産も持った…大丈夫だね」

「お土産？」

「うん、甘いもの食べるかなって」

フェイトの手には紙袋が下がっていた

「あの女が甘いものなんかで喜ぶかねぇ？」

「アルフ、こういうのは多分気持ちなんだよ」

「そうだぞアルフ。きっと喜ぶさ」

「そんなもんかい？」

「それじゃ行ってくるね」

「あぁ気をつけてな」

「転移したら目の前が時の庭園だから道のりに気をつける要素は無いんだけどね」

「いや…でも、もしかしたら座標を少し間違えて…」

「そんな…まさか！？」

ライトがアルフに不安を煽りだした

「もう！そんな失敗はしないよ！！」

「ハハッ！それもそうだな」

転移魔法が発動し始めた

『それでは行ってらっしゃいませ』

「うん。じゃ後でね」

そしてフェイトたちは時の庭園にいった

「行ったか…」

『そうですね…って、なんかこれで最終回みたいな雰囲気になってますけど！？』

「なに一人で慌ててんだよ」

『いや、だって…』

「黙れ」

ゴスッとデスティニーを殴った

『いたっ！』

「そういえば、何でコイツは痛みを感じるんだろう…」

今更の疑問である

※※※※※※※※※※

戻って室内

「怪我人は怪我人らしく寝てるかな」

『マスター…』

デスティニーがいつもと違う雰囲気で話しかけてきた

「どうした？」

『いつまでそのままでいるつもりですか？』

「なに？」

『昨夜のマスターの苦しみ方は異常すぎました。これは何かあったのでしょう？』

「あぁ、あれか…」

ライトはデスティニーの言っている事を理解し、一息ついて話しだした

「昨日の事で思い出したんだよ。無くしてた記憶を」

『記憶を！？何故ですか？』

「さあな…でもわかってるのは昨日の衝撃波と、俺がこの世界に飛ばされてきたものが同じだったんだ」

『…なるほど。それではマスター、昨夜使った技はなんですか？あれほど豪快な技をマスターが編み出すのは不可能ですよ』

「あの技は俺を育ててくれた爺ちゃんが教えてくれたんだ。」

『ほ～それほどスゴい人だったのですね～』

「そのあとすぐに死んじまったけどな」

『……』

「んで、俺は爺ちゃんの遺産でなんとか生きてきたわけだ」

『一人で…ですか？身寄りは？』

「俺に身寄りなんて無かったよ。その爺ちゃんだって血が繋がって無かったしな」

『では、どうやってそのご老人と出会ったのですか？』

「知らねぇよ。物心ついたころには最初から爺ちゃんしかいなかったからな。でも…」

『でも？』

「そのぐらいかな？若い男の人が現れてさ…」

『まさか…その人が何か…』

「俺に剣とか教えてくれた」

『はぁ！？なんでいきなり！？』

「さぁ？なんでも爺ちゃんに昔世話になったことがあるらしくて、死んでるって知らずに訪ねてきたんだって」

『それとマスターに剣を教えた関係は？』

「しらね」

『あぁそうですか…って！アンタ何も知らずに剣習ってたんですか！？バカでしょ！？てかバカですよね！？バカと認めろ！！』

「うるせぇ！自分のマスターに向かってバカ3連呼するな！言って虚しくねぇのか！？」

『そういえばそうですね』

「ホントにテメェのクールダウンの早さには驚かされるな」

『それが私の取り柄なのでw』

「一回プレスしたほうがいいかな…」

『そんな事より話の続きはどうなんですか？』

「自分から話逸らしておいて…（怒）」

『早く♪早く♪』

「……」

コイツ本当にデバイスなのかと思いだしたライトだった

「…めんどくさいから止めた」

『え～…』

「ガキかお前は。そこまで人の過去が知りたいのか？」

『人の過去、失敗談、恥ずかしネタ大好き♪』

「……」

コイツには二度と自分の話はしないとライトは誓った

「んで？今日もフェイトが帰ってきたら行くのか？」

『行くのではないですか？バルディッシュの修復も夕方には終わるみたいですし』

「たまには休み入れればいいのに…」

『ですね～』

「さて…フェイトたちが帰ってくるまでどうするかな…」

『さっきの話の続き！』

「却下」

『え～』

そんなこんなで時間がながれていった

※※※※※※※※※※

『早く聞かせてくださいよ～。てか聞かせろ』
「なんか命令口調になってねぇか？つーか話さねーし」
『ケチー』
すると奥からガチャと音がした
「帰ってきたみたいだな。んじゃその話はまたいつか」
『ぶ～』
外から元気の無いフェイトとアルフが入ってきた
「おか…えり？」
「ただいま…。ライト…どうかした？」
「いや…なんか元気ないなって」
「そんな事無いよ？私は…いつもどおり」
「なら良いんだけど…」
「バルディッシュ…大丈夫？」
『修復完了しました』
「そう…がんばったね」

「それじゃ…行くか？」

「うん…」

「……」

「アルフ？」

「ん？あ…あぁ行こうか」

「？？？」

※※※※※※※※※※※

ビル屋上

「いるな…」

「うん…もうすぐ発動しそうなのが…」

「……」

その瞬間一筋の光が建った

「来た！公園の方！！」

「行こう！」

三人が公園に転移するとそこには木の化け物と白いバリアジャケッ

トのなのはがいた

「フォトンランサー」

〔ギガァァァ！〕

フェイトが魔力弾を放つと木の化け物はバリアを展開し攻撃を防いだ

「わぉ生意気にバリア張ってるね～」

「へ～前よりか強いんだな」

「それに…あの子もいる」

ライトとアルフは木の化け物に注目していたがフェイトはなのはを見ていた。するとそれを感じたのか、なのはが振り向いた

「フェイトちゃん！ライトくん！あれ倒すの手伝って！！」

「どうするのさ？フェイト」

「うん…ライトはどうする？」

「うぇ！？俺？」

どうやら自分に聞かれるなんて思っていなかったようだ

「そうだな…良いんじゃないか？手を組んでも」

「え！？でも…」

「アレを倒すまでだから」

「…うん…わかった」

「よし！じゃあなのは！俺がバリアぶち抜くからフェイトと封印してくれ！！」

「はぁ！？ちょっと待てよ！！」

ライトの発言にアルフが噛みついてきた

「今の見ただろ！並みの攻撃じゃ防がれちまうんだよ！それなのに…」

「俺が並みのヤツに見えるか？」

「え…？」

「やれるな？デスティニー」

『当然です』

ライトは地上に降りデスティニーを木にむけ、魔力を溜めだした

「（魔力を一点に集中するように…）いくぞ！Ｘバスタァー！！」

デスティニーから放たれた砲撃は一直線に木のバリアに直撃し、バリアを完全に破壊した

〔ガァァァァ！！〕

「やっ…あれ？」

しかしライトの砲撃はバリアを破壊した後も消えず、木を貫通し、ジュエル・シードを残して消滅した

「「「……」」」

『マスター…』

「魔力入れすぎた♪」

「ライト君…軽すぎるよ…」

「まぁ良いじゃん。ジュエル・シード出てきたんだから」

「あっそっか！いくよ！フェイトちゃん！！」

「……」

なのはに呼ばれフェイトもバルディッシュを構える

「ジュエル・シード！シリアル７！！」

「封印！！」

周りが一瞬光に包まれた。光が収まると封印されたジュエル・シードが浮いていた

「…ジュエル・シードに衝撃を与えたら暴走するみたいだ」
「うん…夕べみたいな事になったら、私のレイジングハートも、フェイトちゃんのバルディッシュもかわいそうだもんね」
フェイトの言葉になのはは、そう返してきた
「でも…譲れないから」
「私は…フェイトちゃんと話がしたいだけなのに…」
二人はデバイスを通常の状態に戻した
「私が勝ったら…私が甘ったれた子じゃないってわかってもらえたら…お話、聞いてくれるよね」
「……」
なのはの言葉にフェイトは何も返さなかった
「今回は何も言わないんだな。アルフ」
「そりゃ…フェイトに勝てたらね…」
「ふ～ん」
なのはとフェイトは空中で間合いを詰め、互いのデバイスを振り下ろした。
「ストップだ！！」

しかし、どこからともなく現れた黒衣の子供に止められた

「管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ！詳しい事情を聞かせてもらおうか」

「管理局だって！？」

「なんだそれ？美味しいのか？」

「アンタは…！後で話すから今は撤退するよ！！」

「う！？…お…おう」

アルフは空中から地上に降ろされたフェイトに当たらぬように発射する。しかしそれはクロノのバリアによって軽く防がれた

「フェイト！撤退するよ！！」

「ッ…！」

フェイトが空中に飛び上がるとアルフは溜めていた魔力弾を地上に向けて撃ち、爆風を起こした

「（もう少し…）あっ…」

「フェイト！？」

ジュエル・シードを確保しようとフェイトが手を伸ばすと爆風の中から魔力弾が数発出現し、フェイトに当たった

「大丈夫かい？フェイト」

「う…うぅ…」

アルフは自分の身を使ってフェイトの落下を止めた

「逃がさない」

「させるか！！」

「な…！？」

クロノがニ発目の魔力弾を撃とうとしたがライトがそれを阻止した

「フェイトには攻撃させない！！」

「クソッ…（コイツ…なんて力だ…はじき返せない）」

「ライト！！逃げるよ！！」

「わかった！！」

「ま…待て！」

クロノは止めようとしたが遅く、転移していた

※※※※※※※※※※※※

フェイトのマンション

「マズいよ！時空管理局まで出てきたんじゃいつまでここがバレずに済むか…三人で何処かに逃げようよ」

「なぁ…管理局ってなんだ？」

「それは出来ないよ。アルフ。母さんのためだもん」

「でも…」

「おぉ～い…管理局って…」

「あのクソババァ！意味のわからない事を言って…」

「アルフ…母さんの悪口を言っちゃダメ」

「言いたくもなるよ！フェイトをこんな目にあわせて…」

「管理…もういいや…」

ライトはその場から少し離れた隅に腰を下ろした

それから少し経って…

「それで…これからどうやって探すんだい？」

「うん……ライトなら何か思いつくかも…」

「そうだね。ライ…あれ？いない…」

「本当だ…」

ようやくライトがいない事に気づき、二人は周りを見渡した

「ねぇ…アルフ…あれ」

「ん？ゲッ…！」

フェイトが指をさした方向を見ると、部屋の隅で藻を生やしてブツブツ言ってるライトが居た

「ライト―！！戻ってこ～い！！」

「あはは…」

それからライトが元に戻るまで数時間かかった……

第六話　管理局　　映画の時のジャイアンの優しさは異常（後書き）

作者「……」（縄で縛られて逆さ吊りにされてる）

ライト「……」（無言で鞭を伸ばしている）

作者「…ライトさん、始まってますよ？」

ライト「ん？そうか…じゃあ今から作者の公開処刑を始めます！！」

作者「マテマテマテ！！何で！？何で開始直後に処刑！？しかも公開！？」

ライト「当然の報いだ！黒衣、罪状を述べよ」

黒衣「ハイ…」

作者「恐い！恐すぎるよ！黒衣！！全身黒衣って、どこの異端審問会！？しかも声が異常に低い！！」

ライト「ちなみに中はフェイトだ」

作者「フェイトさんんん！？ってバラしたら黒衣の意味無いし！！それ以前に声低すぎる！！」

ライト「変成器使ってるからな」

作者「いーやー！水樹さんヴォイスがー！！（泣）」

フェイト「ねぇライト…言っても良いの？（変成器ＯＦＦ）」

ライト「いいよ。言って」

作者「今顔だしたよね！？よね！？」

黒衣「罪状…この作品の更新をおよそ３ヶ月怠った（変成器ＯＮ）」

作者「えっと…それは…」

ライト「万死に値する」

作者「ちょっと待って！！弁解の余地は！？」

ラ、黒「「ない」」

作者「どしてぇぇ！？」

ライト「よって作者を｛木村さんのハンマー投げの刑｝に処する」

作者「は？木村さん？誰それ？」

ライト「木村さんは木村さんだ」

作者「いやだから、きむ…なんか足音的なズシン的な音が聞こえてきたけど…」

ライト「木村さん後よろしく」（黒衣と共に部屋から退室）

作者「……デカァァァァ！？軽く３メートル超えしてるよね…ち

ょ…吊り下がってる紐持たないで…あああ！回さないでぇぇぇ目が目がぁぁぁぁ！！？」

ライト「これで悪は滅びた…（キリッ）」

第七話　離別　　ジャムおじさんとバタコさんは妖精

ライトｓｉｄｅ

「暑い…」

俺達は山の中を歩いていた…

「何で…」

夏の前だけあってかなり蒸し暑い中を…

「何でこんな所歩いてんだよぉぉぉぉ！！」

それは数時間前にまでさかのぼる…

※※※※※※※※※※※※※※※

「バレないように探すんだったら、ジャミングっぽいのをするしかないんじゃないか？」

「ジャミング？」

俺が管理局にバレないようにする案をだすとフェイトが聞き返してきた

「管理局って魔力センサーがあるんだろ？だったらこの部屋みたいにジャミングをするしかない」

「でもさ、そのジャミングは誰が出すんだい？アタシはそんなで即席でしたことないし…」

「私も…」

「俺に決まってんだろ？」

二人の視線が俺に集まる

「出来るの？」

フェイトが心配そうに聞いてきた

「それは…」

『マスターの魔力を粒子化させて周囲に散布させれば可能です』

助かった…よくわからない説明をデスティニーが代わりにしてくれるようだ

「でもさ、管理局は魔力を感知するんだよ？その魔力を辺りに張り巡らせたら逆に見つかりやすいんじゃ…」

『マスターの魔力は特殊でして、散布した魔力は通信妨害を起こしますから大丈夫です』

意外と俺の魔力って高性能なんだな

「通信妨害って私たちにも影響がでるんじゃ…」

確かに…念話も一応通信と同じだ。それだと俺の魔力でフェイト達の念話を妨害してしまうはずだ…

『それは私が調節しますので平気です♪（キラッ）』

不安だ…スッゴく不安になった…（キラッ♪）さえ無ければ良かったのに…

「はぁ…」

『ムッ…マスター何ですか、その溜め息は。そんなに私の（キラッ♪）が気に入らなかったのですか？』

「気にいる奴がいたらみてみたいモンだな」

『またまた～実は結構気に入ってるんじゃないですか～？私ってスッゴい人気者～♪』

本気でウザい…腕が震えてきた

「ライト…とりあえず落ち着いて…」

「そ…そうだね…今は落ち着いて…」

フェイトとアルフが言ってきたけど…

「今すぐ破壊したい（怒）」

「「だからダメ――！！」」

※※※※※※※※※※※※※※

そんなこんなで今…

「あちぃ…」

「そんな事言わないでよ。こっちだって我慢してんだからさ…」

「誰だよ！こんな場所に行くって言い出したのは！」

「それはアンタだろ！！」

「むぅ……ん？」

「………」

そんな中、フェイトは表情一つ変えず無表情だった

「フェイト、どうした？」

「………」

「お～いフェイト～…」

「…」

返事がない…ただのしｋ「いやいやいや…勝手に殺すな」むぅ…

「起きろ～フェイト～」

「……」

アルフがフェイトの目の前で手をチラつかせてみたが効果が無かった

「おい…これって本気と書いてマジでヤバいんじゃ…」

「しかたないね…フェイト～…ボソボｓ「ふにゃぁぁぁぁぁぁぁぁ？！！」よし！起きた」

アルフがフェイトの耳元で呟くと奇声を発しながら復活した…何言ったんだろ…

「アルフ…今何を言ったんだ？」

「……乙女の秘密♪」

何だろ…悪寒がする…風邪かな…

「霧が出てきたね」

そんな中、復活したフェイトが周りに気がついた

『それはマスターの魔力ですね』

「……へ？もうこんなに広がってたの？」

『既に半径3キロ辺りは…』

「そんなに！？」

「てか俺、こんなに魔力あったんだ」

いや〜俺の魔力ってここまで異常だったんだ（笑）

「それにしてもねぇな〜ジュエル・シード…」

「…うん」

「まぁ簡単に見つかったんじゃ…ん？」

アルフがなにかに気づいたらしい

「どうした？アルフ」

「いや…何か羽ばたく音と鳴き声が聞こえたような…」

「ただの鳥じゃないか？」

「いや…鳥にしては荒すぎ…」
「クエェエエエエエエエ！！」

「「「！！？」」」

その瞬間何かの鳴き声が響き渡った

「す…凄い鳴き声だね…」

「地響きまでするとはな…」

『震度は1から2の間ほどですね』

「「「そこは聞いてない」」」

『（、・ω・、）ショボーン』

「そんな事やってないで！来るよ！！」

空を見上げると普通のカラスの数十倍とも言えそうなほど巨大な鳥らしきものがいた

「デカい…ね」

「旨そうだな」

「「は？」」

こんなにデカいの初めてだな…

「ラ…ライト？なに言ってるの！？」

フェイトが驚きながら話してきた

「なにって…焼いたら旨そうだなって…」

「絶対に観点違うよ！？それ！」

「そうだよ！アタシも最初はそう思ったけど、あれは絶対に唐揚げが旨いよ！！」

「アルフまで！？」

「なるほど…それもアリだな…それでいこう」

鳥はやっぱり唐揚げだな

「デスティニー、まずは叩き落とすぞ」

『了解です』

俺は剣に雷の力を纏わせて振り下ろした

「雷斬衝！！」

［キエェェェェェ！！］

振り下ろした剣の雷に当たり、鳥っぽいのが黒焦げになって落ちてきた

「よし！食える！！」

「ちょっと！コイツは唐揚げじゃないのかい！？これじゃ、ただ焼けただけじゃないか！！」

やべぇ！忘れてた！！

「ここまで焼けたら揚げだって意味ねえよな…」

「もう少し力抑えてよ～」

『それよりもマスター、この鳥からジュエル・シードの反応があり

ます』

「「なに！？」」

ジュエル・シード反応！？それじゃあ…このデカさは…

『ジュエル・シードの影響ですね』

そんなぁ…

「フェイト…封印頼んだ…なんかやる気失せた…」

「う…うん（食べれなかった事そんなにショックだったんだ…）」

クソっ…食いたかったなぁ…巨大鳥…

「食べられないように早く逃げてね」

ふとフェイトを見るとジュエル・シードから解放されて復活したカラスを飛ばせていた

「に～く～…」

「カ…カラスは食べちゃいけないよ？」

「肉は焼くか揚げれば基本食える」

「アタシは生でもいける」

『狼や犬には鳥の骨は内部で刺さるから与えてはいけないようです

よ』

「骨を食わなかったら問題なし！」

「鶏肉の話はもう良いから早く戻ろうよ…」

※※※※※※※※※※※※※

フェイトｓｉｄｅ

「んで、あと探してないのは海周辺だな」

ライトが地図を開いて海を指差した。唐揚げの骨をくわえながら…

「海は広いから後回しにしてたんだよ」

アルフも生肉を食べながら答える。二人ともそんなに鶏肉食べたかったんだね…

「んでライト、作戦は？」

「魔力流して封印する」

結局、作戦同じなんだね。そして…

「魔力を流すのもライトなんでしょ？」

「当たり前」

ライトは骨付きの唐揚げを食べながら普通に答えた

「ねぇ…何で私にその仕事をさせてくれないの？」

私はずっと思っていた事を言った。

「……」

「ねぇ、どうして？そんなに私って頼りないの？」

「…そうじゃないよ」

「それじゃ…どうして？」

「ただ…お前にツラい思いをして欲しくないから」

「…え？」

「お前にはいつも笑っていてほしいから」

「……」

なんでそんな事を笑顔でいえるのかな／／／

「デスティニー、私たちがいるの忘れてるよ～」

『ですね～鈍感人間のクセに』

「だから鈍感人間って何なんだよ！！」

…ライトはツラく無いのかな…

いつも笑っていて…

私たちを明るくしてくれる

記憶が無いのに、自分の魔力を酷使してジュエル・シードを探してくれて、さらには重傷まで負って…
でも私はライトに何かしてあげてたのかな…？私は…ライトに甘えてるだけじゃないのかな？何か出来ないかな…ジュエル・シードも残り少し…全てが終わる前に何かを…

「どした？フェイト」

「ふぇ？な…なんでもないよ！？」

「そっか！」

本当に…素直に笑ってるね…

「…スイカの皮も揚げたら食えるかな？」

…でもちょっと変わってる（汗）

※※※※※※※※※※※※※※※

海上

「よっしゃ！アルフ、胃もたれ起こしてないよな！！」

「アタシが鶏肉程度で、もたれるわけないだろ！」

海の中心にはライトとアルフがいる。
ちなみにフェイトは封印係で離れている

「そうだったな。ならさっさと終わらせるか」

「この間みたいに魔力を出さないのかい？」

「ん～出したいんだk『今回、魔力をどの程度消費するのかわかりませんから、無駄な使用は避ける事にしました』…だそうだ」

またデスティニーが横から入ってきた

「でもそれだと管理局が乱入してくるんじゃ…」

「アイツらは今回後に出てくるだろうな。俺たちが消耗した所を狙って」

「そっか…」

「なに暗くなってんだよ！さっさと終わらせて、ジュエル・シードを渡すんだろ？」

ライトがアルフを励ます

「…うん！そうだったね！（ジュエル・シードを渡してあのクソババァに少しでもフェイトを褒めさせるんだ！！）」

「そんじゃ…始めるか。アルフはそっちを頼む」

「あいよ！」

「…さっそく、上級術いきますか！デスティニー、魔力操作任せた」

『了解です』

ライトは剣を上にあげ、目を瞑り構える

「…悠久の時を巡る優しき風よ……我が前に集いて烈刃と成せ！！」

ライトは目を開き剣を振り下ろした

「サイクロン！！」

その瞬間、ライトの目の前に巨大な竜巻が豪風と共に吹き荒れた

『ジュエル・シードがわずかに反応しました』

「まだまだこれからだ！行くぞ！！」

※※※※※※※※※※※※※

数時間後

辺りはジュエル・シードの影響で竜巻が起こり荒れていた

「流石に…はぁ…複数相手は…調子…乗りすぎたか……？」

『マズいですね…このままだとフェイトさんやアルフの魔力が保ちません』

「私は…まだいけるよ…」

デスティニーの判断にフェイトが答えるが、その声は途切れ途切れだった

「そんな声で信じられると…思ってんのか？」

「ライトだって…だいぶキツそうだよ…」

「俺は…体力が無くなってきた…だけだ」

「私だって…」

「ハァ…アンタ達…夫婦喧嘩…してる場合じゃないだろ？」

二人を見かねたアルフが止めた

「囲まれてるよ…」

ライト達の周りにはジュエル・シードで発生した竜巻が集まってきていた

「いつの間に…」

「俺が…上級術で一気に…」

『ダメです！今の消耗しきった体では、上級術…いや、中級術ですら保ちません』

「でもやるしか……＞ブォン！＜…！？」

ライトがデスティニーの反対を押し切って詠唱しようとすると、空から桃色の砲撃が竜巻の一部を消し去った

「ライトくん！フェイトちゃん！！」

「え…」

「なのは…？」

「良かった～無事で」

なのはがゆっくりとライト達のもとへ降りていく

「どうして…？」

「管理局の船でフェイトちゃん達の映像見て来ちゃった♪」

「やっぱり管理局もいるのか…」

「うん…でもクロノくん達は消耗しきってからだって…」

「あのクソガキ…いつかデコピンでぶっ飛ばす…」

ライトがひとりで決心しているとき、横に金髪の同い年位の男が降りてきた

「ライト！今は封印が先だよ！！」

「「……だれ？」」

ライトとフェイトが同時に聞いた

「へ？」

「いや…だから誰？」

「ゆ…ユーノくん！ライトくん達にはこの姿は初めてだよ！！」

「ユーノ…？」

「あ！そっか！僕はなのはの横にいたフェレットだよ」

「フェレット…？フェイト、そんなの居たっけ？」

「…さぁ？」

「と言うわけでお前はだｒ「居ただろうが！」ゲフッ」

ゴスッと勢い良くアルフに殴られた。ライトだけ

「痛って～！なんで俺だけ！？」

「気分！！」

「酷い！！」

「あのさ…」

二人が言い争いを始めたとき、ユーノ？が話し出した

「とりあえず封印しようよ。周りの状況が良くないからさ」

「フェイトちゃん！」

「え？」

「二人で封印しよ？」

「……」

「お～い、俺は～？」

「あ！ごめん。ライトくん忘れてた」

「…俺って影薄いのかな…？」

『人生そんなことありますよ』

落ち込んでいるライトをデスティニーが慰める。なんとも言えない光景だ

「良いよ。ライトは休んでて」

「は！？いやだから俺が…」

「良いの！！最後くらい私にやらせて」

「…わかったよ」

ライトは二人から少し距離を離した

「アルフ！僕達はサポートを！！」

「アタシに指図するな！フェレットもどき！！」

ユーノとアルフがバインドで竜巻の動きを止める

「行くよ！フェイトちゃん！！」

『ｓｈｏｏｔｉｎｇ　ｍｏｄｅ』

なのはは自身のデバイスを変形させる

『ｓｈｏｏｔｉｎｇ　ｆｏｒｍ　ｓｅｔｕｐ』

バルディッシュが勝手に封印をするときの状態になる

「バルディッシュ…」

『行きましょう』

「……うん！」

フェイトもバルディッシュを構える

「サンダー…」

「ディバイィーン…」

「レイジィィ！！」

「バスタァーー！！！！！」

二人の砲撃は海に直撃し

、光が消えたときには６個のジュエル・シードが宙に浮いていた

「あぁ～終わった終わった♪」

『マスターは最後何もしてませんけどね』

「うるせぇ！」

「ライト！」

そんな中、先ほどのユーノ（？）が話しかけてきた

「あ…え～と…ユーノ…だっけ？」

「どうしてこんなムチャをしたんだよ！！」

「……」

「ライト？」

「ゴメン…ホントに思い出せない」

「え？まだ言ってたの？僕だよ。僕」

『残念ですが。あなたと遭遇した回数は零です』

「新手のオレオレ詐欺か？」

「僕だよ！ユーノだよ！！何回も言ってるだろ！？」

『「ゴメン。わかんない」』

「僕って…いったい…」

ユーノがいじけだすと同時に雲行きが怪しくなってきた

ゴロゴロ…

「…雷？」

『魔力反応があります。ただの雷じゃなさそうですね』

「この魔力…フェイトじゃないよ！」

「アルフ？ならこの魔力は…」

「これは…プレシアの魔法だ！」

その時雷が落ち、フェイトに直撃した

「きゃぁぁぁぁ！！」

「フェイト！！」

ライトは自身の出せるスピードの最大を出し、海へ落下するフェイトを受け止めた

「フェイト！フェイト！！」

「ライト！逃げるよ！！」

「でも、フェイトが…！」

「いいから早く！！」

「クソッ！」そしてライトはフェイトを抱きかかえたままアルフが作った転移魔法の中に飛び込んだ

「え？あ！ちょ！？…行っちゃった…」

「だね…」

※※※※※※※※※※

フェイトのアジト

「だぁー！あの執務官！ムカつくー！！」

部屋の中ではアルフが暴れていた。理由は後から出てきた執務官に邪魔されたらしいが…

「落ち着けよ。アルフ」

「これが落ち着いて…」

「フェイト寝てるから」

「…ごめん」

フェイトは落雷の魔法の直撃をくらい、眠っている

「……」

口には出していないがライト自身かなりイラついている。足の動き

が止まらなく、摩擦で床から煙が出ている程だ

「ライト…」

「なんだアルフ？フェイトが寝てるから…」

「床…燃えるよ」

「……悪い」

「……」

「……」

再び沈黙が空間を支配した

「……」

「……」

「…なぁアルフ」

ビクッ

「な…なんだい？」

「…プレシアの攻撃はジュエル・シードを確保するためなのか？それとも…フェイトを狙ったのか？」

「……それは…」

アルフは答えることが出来なかった
真実を知っているのに
「……ジュエル・シードを確保するためだよ」
「フェイト！？」
アルフの代わりに答えたのは眠っていたハズのフェイトだった
「…起きて大丈夫なのか？フェイト」
「うん。もう平気だよ。」
「それで…本当にフェイトを狙ったわけじゃないんだな？」
「うん…私が近くにいたから当ててしまったんだと思う。だから母さんを悪く思わないで」
フェイトはそう答えるが、どこか辛そうな表情だった
「…わかった。フェイトを信じるよ」
「ライト…！」
「ただし…」
「…！？」
ライトの言葉にフェイトは一瞬明るくなるが、ライトはそれをさえぎった

「今すぐ休め」

「「へ！？」」

ライトから言われた一言は意外なもので、間の抜けた声が二人から出た

「今日は異常なまでに魔力と体力の消費が激しいんだ。今は体を休める事が重要だ。」

「…あの～アタシも？」

「当たり前だ」

「ねぇフェイト…ライトってさ、ちょっと過保護っぽくない？」

「うん…ちょっとね…」

アルフとフェイトはヒソヒソと小声で話していたが…

「聞こえてるぞ」

「「！！？」」

「誰が家政婦だって？」

「言ってない！過保護だとは言ったけど家政婦とは一言も言ってな…ちょっ…ライト！？黒い笑み浮かべながら近づかないで！恐い！恐いか…イダダダダ！痛い！痛い！頭割れる！やめて！アイアン

クローやめてぇぇぇ！！」
アルフはもがきながら悲痛な声をあげていた
「（アルフ…頑張って…）」
それをフェイトは遠い目で見ていた
※※※※※※※※※※※※※※※
「本当に来るのかい？」
「あぁ。そろそろ顔出しておかないとな」
「……」
「どうした？フェイト」
「え？ううん…大丈夫…」
「そうか？もしもキツかったら…」
「体の方はもう大丈夫だから心配しないで」
「なら良いけど」
「それじゃ転移するね」
フェイトは自身の作り出した転移魔法を発動し、三人は転移した

※※※※※※※※※※※※※※

「でっけ…」

ライトたちは現在時の庭園の中を歩いていた

「こんなデカいのをフェイト達だけで使ってんのかよ。スゲーな」

「そ…そうかな」

「あぁ！こんなデカいの見たことねぇよ！！」

ライトはただ一人ハイテンションだった

「スゴい喜びようだね…」

「あはは…まあ記憶が無いから珍しいんじゃないかな？」

二人はライトを呆れ見ていた

「ねぇライト、この中見てまわってくる？」

「えっ…と…なんで？」

「だって、もの凄くはしゃいでたから」

「俺…そんなにはしゃいでた？」

『「「うん」」』

「全員で肯定しなくても…」

「ライトが分かりやすくてね」

『ポーカーフェイス弱すぎてワロタw』

「デスティニーは黙ってろ」

「とにかく！行ってきてよ。ライト」

「でもフェイトの母さんに会わないと…」

「ちょっと母さんと2人で話さないといけない事があるから！」

「…？フェイト…何か隠してないか？」

「い…いや！全然！」

「でも…『行きましょう！マスター』ちょ！デスティニー！引っ張るな！つーかお前人引っ張れるのか！？」

『ついさっき気づきました』

「おぉい！止まれ！！止まれぇぇぇ！！」

ライトの影はデスティニーに引っ張られていくにつれて小さくなっていった

「ねぇフェイト…本当に行かせてよかったの？」

「どうして？」

「どうしてって…アタシはフェイトと精神リンクしているんだよ！？どうしてそんなに1人で抱え込もうとするのさ！！」

「そっか…アルフもツラいんだね。ゴメンね」

「どうして…！」

「大丈夫…もう悲しまないから。もうツラいと思わないから」

「フェイト…」

「行こう。母さんが待ってる」

「……」

フェイトとアルフはライトとは別の方向に歩いていった

※※※※※※※※※※※※※※※

時の庭園通路

「ちょっ…離せ！とにかく止まれ！！」

『ハイ！何ですか？』

「だぁ！？」

デスティニーが急に行動を止めた為に、ライトはバランスを崩し倒れてしまった

「てめぇ…わざと止めただろ…」

『いえいえ気のせいですw』

「その笑いに耐えた言い方ムカつく…」

『ＡＨＡＨＡＨＡ！』

「…そんな事より何でフェイトから離れた？」

『あれ？スルーですか？つまらｎ「デスティニー？」すみませんでした。本当にすみませんでした。お願いですからそのドライバーしまってください』

「…まったく」

ライトはそう言いながら何処からか持ってきたドライバーをポケットにしまった

『フェイトさん…あのままでしたら理由を絶対に話しませんでしたよ』

「だったら何で離れたんだよ」

『ワタシたちが居なくなれば良かったのです。フェイトさんは恐らく自分で抱え込むタイプですから、あのままワタシたちが居てもあの場から動かなかったでしょうし。それであれば一旦離れて後をつけるのが得策でしょう』

「…うん…言いたい事はわかった…」

『でしょう？じゃあフェイトさんを追いかけましょう！』

「どうやって？」

『…はい？』

「いや…だからどうやって？」

『……それは……頑張って♪』

「……（イラッ）」

ガガガリガリガリッガリガリガリガリッ

『ちょっ！ドリル！電動ドリルだめ！痛ッ！死ぬ！！本当に壊れるからヤメテェェェェ！！？！』

※※※※※※※※※※※※※

ガチッ…

「ここも鍵がかかってる」

『スゴいですね～こんな広いのにロックをしっかりしているなんて』

「てめぇはさっさとフェイトかアルフの魔力探ってろ」

『やってるんですけどね～周りから微量な魔力が無数にあってわからないんですよ』

「そういえば何か無駄に鎧みたいな置物多いよな」

『夜な夜な動いているのでは？』

「どこの幽霊屋敷だよ」

『いやいやわかりませんよ？何処からかいきなりドゴーン！！て爆発音が……』

「ないない」

『なんでですか』

「ここは管理局にバレてないってフェイトが言ってたし、もし起こったとした［ドゴーン！！］…ら…」

ライトが話していると何処からか爆発音が響いた

「どっちだ！？」

『この通路を進んだ先です！』

※※※※※※※※※※※※※※※

「この扉だけ開いている？」

『中からフェイトさんの魔力反応があります』

「行こう！」

ライトが奥に進んでいくとフェイトが寝かされており、横の壁は壊されていた

「フェイト！？」

フェイトの体は鞭か何かで打たれたような後が無数にあった

「このマントは…アルフの？」

「ん…んぅ…」

「フェイト！大丈夫か！？」

「あれ？…ライト…どうしてここに？」

「どうしてじゃねぇよ！爆発音がして慌てて来たら部屋が壊れてお前が倒れてるから…」

「そう…なんだ…あれ？これ…アルフの…」

フェイトは自分にかけられていたマントに気がついた

「ライト…アルフは？」

「見ていない…」

『残念ながらアルフの魔力反応は感知できませんでした』

「そんな…」

「フェイト…一体誰がこんな事を…」
すると壊れた部屋の中からゆっくりと黒い髪の女性が出てきた
「だれだ？」
「母さん…」
「なに！？」
奥から出てきたのはフェイトの母プレシアだった
「アンタがプレシアか？」
「あら？アナタがフェイトに協力しているっていう子？」
「そうだ」
「アンタに聞きたい　アルフはどこに行った」
「あぁ…あの使い魔なら逃げていったわよ。もう怖くなったって」
ライトの目には怒りが現れだしていた
「デスティニー…バスターソード」
『しかし…！』
「バスターソード！！」

『…わかりました』

ライトは銃剣のデスティニーを上に投げる　そして落ちてくるときには身の丈ほどの刀身のある大剣となって目の前に刺さった

「最後に…フェイトにこんな仕打ちをしたのはお前か？」

プレシアはフッと笑った

「ええ、そうよ。だったら何？」

「……」

地面に刺さったデスティニーを抜き肩で担いだ

「質問は終わり？それじゃあ早くジュエル・シードを…」

「黙れよ」

「あら？何かしら？アナタはフェイトの協力者何でしょう？だったら早く白いのから奪って…」

「黙れって言ってんだクソババァ！！」

ライトはプレシアに切りかかった

しかしプレシアはいとも容易く防護壁で防いだ

「全く…いきなり切りかかってくるなんて、礼儀のなってない子ね！」

そのままライトを弾き飛ばし、壁にぶつける

「ガハッ…」

「これでわかったでしょう？私に楯突こうなんて考えたって…」

「だから…どうした…」

「…なに？」

「だから…どうした！！！」

その瞬間ライトの中で何かが弾けた

「オリャァァ！！」

ガキンッ！

「フン…まだあま…」

ピシッ…

「なっ…」

バキンッ　ザシュッ

「くっ…」

「母さん！！」

ライトの打ち込んだ一撃はプレシアの防護壁を砕き、腕を斬りつけた

「力だけはあるみたいね…」

「うぐぁぁぁぁ！！」

再びライトが大剣を構え接近してきた

「でも動きが単調で力任せ…まるで獣ね」

「な…」

プレシアは素手でガシッとデスティニーを受け止め、横に流す。
まだ大剣の重さに慣れていないライトはそのまま体のバランスも崩して倒れてしまった

「う…クソッ！」

ライトがプレシアの方を向くと手に魔力を溜めていた

「母さん止めて！！」

「よく見ておきなさい、フェイト。プラズマランサー・ファランクスシフト」

ライトの目の前で放たれた魔法は逃げる猶予もなく爆音と共にライトを飲み込んだ

「ライトォォォ！！」

煙が徐々に晴れていくとライトはボロボロになりながらも大剣を杖代わりにして立ち上がった

「ハァ…ハァ…ハァ…」

「スゴいわね。今のなかなかの威力だったのに」

「うっせ…んだ…よ…クソ…ババァ…」

ライトはなんとか言い返すも、いつ倒れてもおかしくない程にフラフラしていた

「ライトも…もうやめて…」

『そうです！ここは一時退却しましょう！！』

「嫌…だ…」

フェイトらが逃げるように言ったがライトは真っ直ぐプレシアを見て断った

「ここで…逃げ…たら…誰が…フェイトの…事を守…るんだよ…」

『しかし！！』

「決めたんだよ…俺が…フェイトを守るって！！」

「へぇ…立派な心掛けね。ヘドがでそうだわ」

「なっ…」

気がついたと目の前にはプレシアがいた。そしてライトの頭を掴み持ち上げた

「がっ…」

持ち上げられると同時に大剣を落としてしまった

『マスター！！』

「止めて…母さん…」

「フェイト…よく見ておきなさい。母さんの邪魔をした男の末路を」

プレシアはライトを掴んだ手に魔力を溜めだした

「止めて…」

ドンッ…

「ガッ…」

「止めてよ…母さん…」

ドンッ…

「ガハッ…」

ライトは魔法をくらう度に小さい悲鳴を上げながら小刻みに動いていた

ドンッ…

「ガフッ…」

ドンッ…

ドンッ…

ドンッ…

そしてついにはライトの悲鳴も聞こえなくなり小刻みに動いていた体も動かなくなった

「あら…動かなくなったわね…それじゃあ終わりにしましょうか」

プレシアは掴んでいるてに再び魔法を溜めだした

「さようなら、フェイトの騎士さん」

バシュッと放たれた魔法は、そのままライトを壁に叩きつけ、壁に打ちつけられたトマトのようにグシャッとライトの血が広がった

「いや…嫌…イヤァァァァァ！！」

フェイトはその光景を見て、目を隠し涙を流していた

『ライト！！』

大剣状態のデスティニーはすぐさま自信をスタンバイ状態の腕輪に戻し、ライトの腕に取り付いた

「ハァ…ハァ…ハァ…」

『（まだ息がある…だとしたら生き長らえれるハズ…どこか転移出来る場所を…）』

デスティニーはライトがまだ生きている事を確認すると転移魔法を展開し、プレシアに気づかれないように念話を飛ばした

『（フェイトさん…）』

「（デス…ティニー…ライトが…死ん…）」

『（彼はまだ死んでいません！彼は…ライトは私が必ず生かします！！だから少しの間だけ待っていて下さい）』

「（デス…ティニー？）」

『どこか…治療出来る場所に…転移！』

その瞬間部屋を銀の閃光が包む。

光がおさまると、ライトの姿は無くなっていた

「まったく…無駄な魔力を使わせてくれたわね」

「……」

フェイトはただライトの血が溜まっている場所を見ていた

「いい？フェイト。母さんは、母さんの邪魔をする奴を殺したの。

そして使い魔も逃げてしまった。必要ならもっと優秀な使い魔を用意するわ。だから…あの白い子からジュエル・シードを奪ってきなさい」

「……」

「フェイト？」

「はい…母さん…」

フェイトはただ力無く答えた

ライトの血溜まりを見ながら

※※※※※※※※※※※※※

？？？

どこかの空間を銀の閃光が包み込んだ。

光が消えると血だらけで横たわっているライトの姿があった

「おい！大丈夫か！？」

「……」

慌てた少年の声がこだまするもライトは返事をしなかった

「マズいな…早く担架の用意を！！」

「わ…わかった！」

「（フェイ…ト…）」

自分の周りで騒ぐ声が聞こえるがライトはそのまま意識を落としてしまった

第七話　離別　　ジャムおじさんとバタコさんは妖精（後書き）

作者「未来を切り開く！！」

ライト「すみません。ついにアホ作者が壊れました」

作者「こらこら勝手に廃人扱いするな！！」

ライト「したくもなるだろ！！なに？前回のお仕置き完全無視！？半年弱もなにやってたんだよ！！」

作者「リアル生活（キリッ」

ライト「……（ニコッ）」

作者「ギャァァァァァ！！裂ける！！手の指の間裂けるｕｕｕｕ！！」

ライト「オラオラ！お前の血は何色だぁぁぁぁぁ！！」

作者「ギャァァァァァス！！！」

※しばらくお待ちください※

ライト「あ～スッキリした」

作者［本当にすみませんでした（血文字）］

ライト「あれ？もう終わり？んじゃまた次回！！」

作者［次回こそ頑張って早く書きます（血文字）］

ライト「あっまだ死んでなかったのか。向こうの部屋で続きするか（作者の足首を掴んで扉に向かう）」

作者［タスケテー（血文字）］

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n0105n/

魔法少女リリカルなのは 異世界から来た少年

2011年10月7日18時55分発行